

パルコキノシタ「私と震災 命を描く」

PARCO KINOSHITA, “An Earthquake and Me: Drawing One’s Life”

教養学部では、初年次生の必修科目として「アカデミック・スキルズ」を開設して久しい。「アカデミック・スキルズ」は、入学したばかりの大学一年生に、大学での学びの基本を学修してもらうことを目的に設置されている。授業でのノートの取り方や文献の探し方などからはじまり、探求するテーマを自ら見つけ、参考文献を収集して整理分析し、グループ・ディスカッションやプレゼンテーションを経てレポートを作成するまでの一連の作業を経験する。

本稿は、その「アカデミック・スキルズ」科目の全体会にゲスト・スピーカーとしてパルコキノシタ氏を招き、講義していただいた講演の記録である。講義は2019年6月28日（金）、埼玉大学全学講義棟 1-301 教室でおこなわれた。

企画文責：野中進+牧陽一

はじめに

牧陽一（司会）：

おはようございます。私、アカデミック・スキルズは隔年ぐらいで担当してるんです。今年は担当していませんですけど、もう20年前からですね、目をつけてたというか、一回大学で授業していただきたいなと思っていました、今回パルコキノシタさん、お呼びしました。

僕は20年くらい前に、2000年ですね、韓国の光州で国際展があったんですけど、光州ビエンナーレ、その時に初めてお会いして、国際展っていうのは世界中のアーティストを呼んで展覧会やるんですけども、そこに呼ばれてもないパルコキノシタさんは来ていて、外でパフォーマンスを、ハンディカラオケで歌うっていう凄まじい、これ主体的なんだなと。なんか人に呼ばれて展覧会に参加するんじゃなくて、自分で勝手に好きなのところに行って自分の表現をするっていうね、すごい主体的なことなんだと思って、あとで考えるとすごい人なんだなと、その時名刺をいただきました。

あと2015年に、ろくでなし子さんにここで授業やってもらったことあるんですけど、その前に、もうすでにろくでなし子さんを支持することを表明していて、パルコさんはですね。それで、裁判所まで行って、絵を描いて。勝手に行って、勝手にというか、抽選に当たって行って、それで、裁判記録画というか、そういうものを発表していて、なんて面白いことするんだろうと思いました。だから、自分で発信するということを僕はパルコさんに学んだんです。

で、そのあと、2000年に漫画で「漂流教師」という漫画ですね、これをですね、今はなき『ガロ』という雑誌で中心に活動されてて、漫画家として活動されていました。「漂流教師」というのは「漂流教室」という模図かずお先生の名作がありますが、それをちょっともじっているんですけども、パルコさん自身が先生をずっとやっていらっしやって、その時の体験をもとにした漫画ですけ

れども、主人公の先生のごくナイーブで優しい心に出会って、感動感銘しました。すごい漫画だったので、ずっと漫画家として活動されるのかなと思っていたら、そうじゃなくて、漫画家はやらなくてずっとアーティストとして活動されてきました。

そのあと、2015年だと思いますけど、ワークショップというか制作現場を見ることができました。府中市美術館ですけども、それで、絵を作ってる現場で、久しぶりにお会いしたんですけども、それで、その時、名作と言われていると思いますけれども、「幽霊でもいいから」とか「います」とか、あとで見ることができますが、震災後と津波の被害をテーマに描いた作品ですね。それから作った木像というか人型というか、そういうもの。石巻市で、震災で、津波で亡くなった方、行方不明の方が、4,000人くらいと言われて、それじゃおかしいだろ、3,977人です。ということで3,977体の仏像じゃないですけど人型を作っていくわけですね。これ思ったのが、手塚治虫の原作の「火の鳥」の鳳凰編というのがあって、僕ら小学生くらいのとき読んで感銘したけれども、そこに我王っていうね、人が出てくるんですね。最初盗賊ですごい悪い人だったんですけど、最後にはずっと彫刻を作り続けるっていう人ね、それをイメージしたんですね。だから、まあ生活がまさにアート、いまのパルコさんは生活イコールアートみたいな、日々を送られていると思うんです。

だから、このアカデミック・スキルズって、論文書くテクニカルな問題なんですけど、だいたいは、だけどやっぱりなんかね、やっぱり人文科学中心のこの学部でやっぱり、人間の心とか、そういうものを、一番難しいところを皆さんは考えてやっていかれると思うので、一つ大きなヒントをここで得て欲しいなと思って、これを企画しました。じゃよろしくをお願いします。

講義

パルコキノシタ（講師）：

こんにちは、皆さん、初めまして、パルコキノシタです。台風くるから天気が悪いと聞いたから、5人くらいかと思っていたんですけど、すごいたくさん来ていただいて、本当に感謝しています。雨降っているのに、本当偉いねと思っています。何を隠そう僕はすごい昔、若い頃ですけど、生まれて初めて先生やった24歳の時に、埼玉県の庄和町という所のある小さな小学校で1年間だけ、小学校3年生の担任持ったことがあります。中学校の美術教師の免許しか持っていなかったんですけども、中学の免許があったら、小学校の臨時免許出してあげるよと言われて。なんですけども、それまで、僕ね、美術大学は卒業したものの、なんかその美術を通して、目標みたいなものを持ってずにですね、なんかこう、大学受験は合格したけど卒業した後、何すればいいんだろうみたいなところで、子ども達と描いた自由な絵に出会ったんですね。

で、そんときに、なんというかな、アートって聞くと、はいこの絵1億円とかね、なんかいいのか悪いのかよくわかんないやつに10億円とかって、もう全然自分の生活と組み合わせられるようなリアリティが全くなかったんですけど、子ども達は本当に図工好きな人って聞いたら、全員がはいって手を上げて、これだーと思ってですね。僕は美術のハードルをどこまで下げられるかということをやったわけなんです。さっき牧先生がおっしゃっていた、韓国に頼まれもせず、勝手に行って

カラオケ歌ったり踊ったりして帰る、あと日本でうまい棒とか駄菓子を買って、それを外国の人に食わせて味の感想を聞くとか、そういうことをやっていた。それは全て、外国人恐るに足らずとか、美術といえぱなんかちょっとお高い高尚な世界でしょみたいなものをいかに自分たちの日常生活の中に下げていくことができるかみたいな。まあそういうことをやっていたわけですね。

で、でもまあ、東京の美術学校で20年、25年くらい先生やって、このまま自分は教師として、あるいは中の下くらいのアーティストとして、一生終わるのかと思っていたところに、3.11、地震がありまして、なんか気が付いたら被災地に行って支援活動していた。で、まあその辺りを今日は重点的にお話できたらと思います。すごく写真の量が多いので、早口で行きます。質問とかあれば後で、聞きますから言ってください。時系列でいうと、前後関係が入り乱れるかもしれませんが、それも含めて写真を見ながら説明したいと思います。

【インドネシア】



これ、インドネシアのバンダアチェというところですよ。インドネシアのスマトラ沖地震というのがありまして、23万人の犠牲者が出た。ちょっと日本では、歴史上23万人が亡くなるというのはない、関東大震災でも11万人とかですから。その未曾有の震災を体験したスマトラの特に被害がおおきかったバンダアチェというところに行って、子ども達とワークショップをやってきました。あの、KPLPと書いてある、これインドネシアの警備艇の船なんですけど、こういうものがずーっと流されて、日本でも気仙沼とかに大きい船がそのまま漂着したりしてるのありましたけど、日本ではほとんど解体しましたけども、インドネシアではもうそれほったらかしというか、そこをそのまま船を中心に公園を作り直したりして、子どもの遊び場になっているということなんです。僕はここで子ども達と一緒に、木彫りのワークショップをやったりとか、お菓子を食ったりとか、そういうことをやりました。

日本では木彫りを彫ると、なんか犠牲者の霊を祈るとか、ちょっと美術だけじゃなく宗教的な意味合いが出てくるんですが、イスラム教徒の場合は偶像崇拝を一切認めてないんですね。だから、神様はアラー一人しかいないということですから、だからこれは仏像でもお地藏さんでもなく、ただ木の人形を作ろうということやってたんですけどね。日本では、亡くなった人の魂を、そういう人のことを思いながら彫るといった感じでやっていました。

インドネシアのバンダアチェっていうのはほんと赤道の真下にあつてですね、一年中夏。でも日本の夏よりは涼しい。なんかすごく快適な場所だったんですけど、まあそこに、スマトラ沖地震の記録を残したツナミ・ミュージアムっていう、その、津波をかたどった、津波を記録した美術館、珍しいんですけど、そういうものが建っています。そこでも来場者に向けて木彫りのワークショップをやったと。ま、宗教性はなく、ただ本当に津波で犠牲になった人たちを彫ろうみたいな感じで彫ったんですけどね。これがその時の日本チームとインドネシアチームなんですけど。

なんか話飛ぶんですけど、僕が3.11のことがあって被災被害の大きかった石巻とか女川とかそういうところに通っていくうちに、様々な人との交流が生まれたんですね。同じように石巻や女川では、ただ地震が来ただけではなくそれがきっかけで心に傷を持ってしまったまま今も精神的な病氣と闘ってる治療してる人がたくさんいる訳ですね。ところがですね、インドネシアで23万人の犠牲者が出たそのバンダアチェというところはですね、それほどの未曾有の被害が出ながら、自殺者とかがゼロだったんですね。同じような苦しみを共有するものとして、日本の東日本大震災よりも10年くらい早く大震災を体験したバンダアチェの人たちはどういうふうにも精神面で乗り越えていったのかということ学ぶために、一緒に行かないかというお誘いがあった僕が行ったんですね。

で、話がすごく膨らむからどこまで説明できるかわからないんですが、あの今被災地は何千人何百人が亡くなった場所に、追悼の思いを記録するためのメモリアル・モニュメントがばんばん建ったりするんですけども、そういうところを見ると、なんか一番悲しんだ人が偉いかのような、ものすごく悲しそうな像とかがいっぱいあるんですね。いつまでもなくなった人のことを悲しい悲しいと思いつけることがまあ供養だ、みたいな、それももちろん大切なんですけども。

インドネシアの人たちはですね、イスラム教徒で圧倒的に神に対する信仰心というのが強くてですね。はっきり言われてた。津波は神が決めたことだからしょうがないとあって、あっさり言い切ったりとか。あと、イスラム教では自殺が一番やってはいけないことの一つで、やったら最後地獄に落ちると言われているというのと、あと、津波で亡くなった人たちは、アラーが、神様が、その人たちのことを好きすぎて、そばに置いておきたいから神様が自分たちのそばに置いておくために連れていったんだよというようにみんな結構信じてまして。

震災っていう具体的なものすごい悲劇、ものすごいショッキングな出来事に対して、精神面メンタルなところで、立ち直っていくところで、神への信仰心というのがすごくあるなって思いました。だから、アチェ、インドネシアの人たちだってお金持ちの人も貧しい人もいろんな人がいる訳ですけど、アラーの神はどのような人にも必ず一人一人ついていて、イスラムは信仰的に孤独な人を絶対作らないという教えがあるんですね。1日5回お祈りをするんですけども、そこでもうほんとに赤の他人同士でもモスクに集まってお祈りするとですね、誰彼ともなく普通に世間話とかしてですね、街全体が一つの家のような、人と人をつなぐところのバリアみたいなものがほんとに薄くてですね、誰とでもすぐお話しできる。それは、神様がそばにいて神様に守られているイスラムの信仰というものがすごく強いおかげで、アチェの人は23万という犠牲を出しながらも乗り越えてきているのかなと思ったりしたのが一つですね。

あとまあ僕もちょっと面白い格好で行ったんですけど。本当に言われるのは、なんで日本人のよ

うなあんたが、このような、その津波の被害にあって、ど田舎で何にもないところにいるのか、すごい言われて。別に僕、無名で、芸能人でもないのに、日本人だというだけで、握手してくださいとかね、写真撮りましょうとかね、いろいろ言われて。だからちょっと僕の美術スキルでドラゴンボールの悟空とか描いてあげたら、ギャーって大騒ぎになってですね、これはもうちょっとしたスター気分を味わったというのがあるんですけども。

まあ本当にお客さんがたくさん来てですね、日本の美術館とちょっとやっば違うんですね。ここツナミ・ミュージアムの中なんですけど、津波がどういうふうにしてやってきたかという記録と、科学的分析と、津波をモチーフにした美術作品とあるんですけど、建物全体が丸く、イスラム教徒って回教、回る宗教とも呼ばれているんですけども、美術館ツナミ・ミュージアムの中をぐるっと一周回るとご利益があるみたいな、そういうふうな構造になっていて、やっぱりミュージアムそのものに信仰、ミュージアムの展示を一回見るとご利益があるみたいな、回りながらお祈りしながら犠牲者を追悼しながら、ミュージアムの展示物を見るというそういう観光資源になっているんで。

「アニメとか」

あー、これ、インドネシアの子に僕が描いてあげたんですけれども、まあさらさらっと描いてあげたら、すごい盛り上がる。インドネシアの子に今一番好きなアニメなんだが知っていますか。あのね、「ワンパンマン」なんですよ。歌えるんですね主題歌、インドネシアの子らね。すごい情報も早くですね、『君の名は。』は、どっかのネットでもう見えて、『天気の子』が楽しみだと言ってるから、もうほんとにアニメ好きな人がめっちゃ多いちゆうことですね。あの、この木彫りの中にも日本の漫画をモチーフにしたような、そういうものも結構あったりしましたね。

どっかで見た日本のイメージでこけしとか桜とかそういったものを描いてくれて。この子たちほんとに、田舎だよ何もないよと言ってたんですけど、ほぼ全員スマホ持ってまして、ツイッターじゃなくてワッツアップとかが多いんですけど。 아이폰じゃなく韓国製のスマホとかなんですけど、ほぼ日本の学生さんたちが得られているライフスタイルに必要なものはほぼ全く同じものを持っていてですね。大理石の広いモスクのみたいなところで、いつも女の子たちゴロゴロしながらスマホやったりする風景を見てましたね。

似たような写真がばっかりで恐縮ですが、ただみんな木彫りの絵が可愛らしいですね。あの一、インドネシアにはいわゆる美術っていう授業がないんです。で、なんかあの、小学生も

午前中は義務教育で誰でもタダで受けれるんですけども、午後は希望者がちょっとお金払って追加の授業を受けるという仕組みになっていて。でもそこにも図工の授業とかがないってんで、めちゃめちゃ食いつきが良くてですね。ワークショップ、こんなやりがい初めてだというくらい反応が良かったっていうのはありますね。

「インドネシア人の語学」

で、ここにいる人たちの中に何人か日本語が喋れる人たちがいるんですね。今話題になってますけど、日本で働きたい実習生。いろんなところで日本語教えているというのがありまして。国際交流基金とか日本の行政、団体も、大学の授業で日本語の授業を増やしてくださいみたいな働きかけをしていて、インドネシアの大学で日本語の授業をたくさんやってくると、その人たちが日本に来てくれる。で、優秀な人材が日本に来て働いてくれるというのがあって。

インドネシアの中でもバンドアチェというのは確かに貧しいっちゃ貧しいかもしれない。あんましその、大きな企業とかがないんですけど、本屋さんに行ったらエクセル、パワポ講座とか売ってますね。みんなすごく熱心なイスラム教徒なんですけど、イスラム教徒の教典のコーランちゅうのはアラビア語で書かれている訳なんです。だからバンドアチェに住んでいる人はインドネシア語とアラビア語の両方がほぼ理解できていて。で、しかも、僕と一緒に友達になってくれた、実習生を希望している人たちは日本語もちろんしゃべれて3カ国語、で大体英語も喋れるから、大体インドネシアの人は4カ国語くらい喋れるんですね。非常にインテリジェンスの高い学生さんがなぜか日本に来て缶詰工場とかで働いているのがちょっと勿体無いような気がして。ほんとはもっとう、中枢でプログラミングみたいなものもそういうこともできる人たちがほとんどなんですけどね。

あ、これがその今から14年前のスマトラ島で起きた時の写真です。まああの正直、3.11の東日本の時の写真とほんとによく似ていて。まああえて外してはいるんですけど、インドネシアとかは死体の写真を隠したりしないんで、ほんとにいっぱい死体のある写真とかもほんとはあるんですけど、まあこういう状態でしたね。



「アチェ＝ジャパン・コミュニティアート・プロジェクト」

僕たちは日本のNPOが被災地と被災地とを結ぶ国際交流をしようということで、アチェ＝ジャパン・コミュニティアート・プロジェクトというのを立ち上げて、向こうに行った。で最初は僕たちが企画したアート展をバンダアチェでやってアチェの学生さんたちに参加してもらおうという、それが1回目だったんですけど。去年2018年は、2回目で、そこではその、バンダアチェの学生たちにアートの企画を立てさせてですね、それでだんだん、最初は僕たちがやる、次は学生たちが立てたプランを支援する、そういうふうな形で、だんだん自主性みたいなものを持ってやってもらうようにですね。これがその、ツナミ・ミュージアムの中なんですよ。ここ見るとわかるんだけど円形になってまして、ぐるっと回ると、あの縦の円柱状になっているものの中に、犠牲で亡くなった方の名前がびっしりと書き込まれていて、そこ一周すると、参拝をしたことになるっていうことなんです。

でこれは、バンダアチェの学生の企画で、津波のジオラマ、大体5歳から10歳くらいの子も対象に、その子達は生まれた時にはもう津波は終わって見てはいないんだけど、後から得た学習で、津波のイメージを立体作品にして、作品にするというのやっていました。まあとにかく、高いところに逃げるとかね、とにかく逃げろみたいな、津波が来て波が引くと、魚が浮いてるけどその魚捕ったらそのまま津波でやられるからとにかく逃げろとか、そんないろいろ学習してるのを、そういうのを子どもらに津波を知らない世代に伝えていくという活動をものづくりでやったりして。まあこれそういうことをやっていました。これはその子ども達や学生たちと一緒に描いた寄せ書き、落書きみたいなもんですよ。でこれは、バンダアチェにある大学がラジオ局を持っていて、ラジオ局の設備だけ作って運営は全部学生がやっているっていう、学生が経営、運営しているラジオ局のFM番組に出た時の記念写真っていう感じですね。

「インドネシア人 in 福島」

これはちょっと話が飛びましてね、インドネシアの人たちが福島に来た時の写真とかが混ざって

ましたけど。ここは立入禁止区域になった福島の春すごい桜が綺麗なんだけど立ち入ることができなかったっていう場所、ある程度立ち入れるようになったんでそこで写真を撮った、日本にきた人たちですね。

じゃコト研にいけます。

【コトのアート研究所】

はい、最初はね、東京から通ってたんですけど被災地に。で、そこで気がついたんだけど、就職もしてないし、なんの仕事しているのかよくわからないのに、なんか食っている人がいるなあと思ったら、その人たちは社団法人とかNPOとか、いろんなところから助成金を集めてそれで運営して、被災地のコミュニティ支援をやったりするような団体の人たちに、たくさん会ったんですね。でそれ見たときに、あ、なんとかなるんだったら、俺もこっちがいい、とか思って学校の先生辞めてですね、でそのまま石巻に移住したわけなんですけども。もう今ね、やっぱり津波がまた来るかもわからないつって、石巻って正直、人口流出がすごい、もうどんどん人が減ってるんですね。で、空き家が増えた。その空き家を、我々一応美術の心得があるということで、リノベーションをして、新しい、ちょっと建物古いけど、ちょっとかっこいいお洒落な家に改造するっていうのを、それをやって、でそこを民泊にして、旅行、被災地をダークツーリズムで見学に来た人たちを安く泊める、そういった宿泊施設を作ろうとしている、それが「コトのアート研究所」っていう名前なんですね。それが、今僕のやってる仕事の大きい分量を占めているものです。

で、これがそのコトのアート研究所に出てくるイメージキャラクターで、クラウドファンディン

グ、この間やったんですけど、寄付してくれた人にはこのキャラクターのトートバッグとかキャラクターグッズを差し上げるみたいな感じで。男の子の方がマキオ君、頭みて下さいね、石が巻いてるから石巻みたいな。そういう感じでこのキャラ。でこっちが大漁旗持ってる、コトのアート研究所のコトちゃん。コトちゃんとマキオ君っていう。これ、僕がもともと漫画家なので、そういう漫画家のスキルでチョロチョロっと描いたもんですけど。まあこれからこのキャラクターグッズとかも売ったりとか、コトのアート研究所の知名度を広げていって、どんどん被災地と交流、いろんな首都圏から来る人とか、いろんな人を通じてですね、被災地の跡とかを、案内するガイドとかをやったりして、震災に備える強いコミュニティづくり、強い街づくりを目指すというようなことをやろうとしているわけですね。

「おしるこカフェ」

で、同じくこれが僕のライフワークにもなるんですけども、NPOの人、何人とも組んでやっているおしるこカフェっていうのがあるんですね。ちょっとこれはね、話長くなるんですけども。

国は、津波が来て、家流された、街壊れたっていうふうになるとですね、とりあえず、道路直しましょう、家建てましょう、綺麗なマンション建てるから被災者は安く住めるようにしますよ、はい十分国はやりましたよねって言って、まあ、そういうところで割と終わっちゃうんですけど、実際その、被災した人たちっていうのは、自分の愛すべき故郷も失い、そこに住んでいた近所づきあいとか、友達とかも、みんないなくなっちゃって、非常に孤独だったんですね。それが理由で、自殺

されたりとか、本当に心を病んでしまったりとか、そういう人が出てくる。それは本当に、大げさでもなんでもなくて、あの阪神大震災の時にも全く同じことが起きていて、僕は年齢的に阪神大震災の時も、震災の後に心を病んでしまった人がいっぱい出てきてしまったこととか、お年寄りを誰も介護できずに孤独死させてしまったりとか、そういうことがたくさん起きていたって分かったたので、そういうことを食い止めるために、ゆるーくゆるーく連帯を絆を強めていくことはできないだろうかということで始めたのがこのおしるこカフェだったんですね。

で、おしるこカフェっちゅうのはただ単に、仮設住宅で住んでる人たち、本当に広いんですよ、地域が、もう塩釜、松島、石巻、名取、もういろんな所の、宮城県中の被害があつたどこの誰かわかんない人が、何百世帯も、2000人とかすごい数ね。本当に戦時中の収容所みたいな感じのボロボロの仮設住宅に押し込まれてひしめきあってるんですけど、はっきり言ってみんななんで私だけが、こんな酷い目に合わなければいけないのみたいな感じで、本当に疲れ果ててると。僕たちは何にもできないけどとにかく、おしるこ作って食べようよ！っていうのを、もう震災があつてからずっと月に一回ペースで続けていて、で現時点でもう90回ぐらいやってる。僕は10回目ぐらいから参加してるんですけど、本当にそういうふうな人たちが、もう一回ゼロからゼロベースでコミュニティを再構築するためには、やっぱり話をできるようなきっかけを作ろう、場を作ろうつって、お昼ご飯食べて、おしるこを食べて、お茶飲んで、で演歌歌手の人にボランティアで歌歌ってもらって、僕はおばあちゃんに絵の手ほどきをする。ぬり絵を僕が下書きを書いて持ってきて一緒に描いたりとか。そういうふうなことをやっていたんですね。

【狩猟】

ちょっとこれ話が飛ぶんですけども。今これ、話飛びますよ。



僕、今石巻に住んでるんですけど、芸術家だったんですけど、最近猟師の免許とったんですよ。ハンターのね。猟師っていうのはですね、うまく言えないんですけど、俺自身の人間の力を試すじゃないんですけど、食べ物はもともと命があるわけですよ、これも話せば長いんですけど、僕は最初津波で大勢の人が亡くなった時に、神様の所業にあまりにもひどいと思って、で鹿っていうのはよく神様の使いとかって言われてるんですけど、こんちくしょーと、なんか神様にリベンジしてやるとか言って、それでこうハンターになって。

で、山入って銃バンバン撃って、鹿バンバン捕まえて、それをバンバンカレーとかにして、おしるこカフェでおばあちゃん達に食わせてたんですね。で、何にも悪いことしてない何の罪もないおばあちゃんとか、あと赤ん坊とか子どもとか、そんな人をね、2万人くらい死んじやうってね、これ、どっかのSFの小説とかファンタジーの世界でないようなことが本当に現実で起きちゃったんですよ。なんかもうよくわかんないけど、なんか僕、腹が立ったんですよ、それに対して。目に見えないけど。それが僕がハンターになって猟師になる、で鹿を取るきっかけだったんですけど。

まあ僕は最初ね、蛇見ただけでも逃げちゃうような男の子でしたけど、今包丁一本あったら鹿一頭くらいバラせるようになりましたから、僕自身も変化があったと思うんですけど。ただ、僕自身は今感じてるのは、鹿が獲れる日にね、前の晩にね、目に見えない知らせがあるんですよ。夢に出てきたこともあるけど。罾を仕掛けて、毎朝罾を見に行くんですけど、鹿がかかってる前の日には必ず予兆があるんですよ。

で、これちょっと言葉で説明できないんですけど、どうやら僕が、神様に対してリベンジしたいと思って鹿を取ろうとしたその行為なんですけど、実は全くあべこべで、その神様は、パルコ食べていいよ、お食べ、ってこう、なんか神様が俺にそう言ってる。だから、そういう予感がする時に罾見に行ったらかかってるんですよ。あれ、と思って。でなんかうまく言えないんですけど、2万人の命を奪ったその津波を、僕は最初すごく激しい憎しみの心で見ってたんですけど。

なんか、こんなひどい場所には住めないって、被災した人もどんどん石巻や被災した街から出て行っちゃったんですけど、でもなんか、命っていうのは循環するっていうんですかね。海の水が、蒸気になって、雲になって、山に降り注いで、そこで草木が伸びて、それを鹿が食べて、その鹿俺食って、みたいな。で多分俺も死んで、俺の体も粒子ですから、いつか海に流れて行って、それがまた雲になって、みたいな感じで、こう、命の循環の大きい流れが、僕その鹿の猟をした時に見えたんですよ。

で、今オリンピックだ何だつって、日本は全部もう震災のこととか忘れちゃうくらい、景気取り戻そうぜってみたいな感じでこうなっちゃってる中で、被災地の人たちはいつもなんか取り残されちゃったのかなあみたいな、なんか復興全然終わってないのに、なんか助成金とか支援終わっちゃうのかなあみたいな、そういうことがあったんですけど。

まあでも、僕がここで、何千人の人が亡くなったということが有る限り、その石巻っていう場所が、ただの田舎の地方の港町ではなくて、ものすごい特別な意味を持った、特別な場所だっていうふうに、まあその犠牲があることによって、どうしても意識せざるを得ない中で、そこで、やっぱ人間が、自然とか、災害があつて、やだよ、こりごりだよって、安全な場所に逃げるっていう、それ

も一つの正しい方法だと思うんですけど。僕はむしろその、人間と自然っていうのは切り離して生きることは絶対不可能なので、僕はアーティストとして、その自然と向き合うっていう作品を作る、とハンターをしながら心に決めて、それで完全に移住して。で、今はリボンアート・フェスティバルっていう大きいイベントが、夏に8月にあるんですけど、そこで、命が、人間の命は自然の中でずっと一つの循環の輪の中に存在しているみたいな、そういうのを作品に表そうと今やってるんですね。



「ジビエ肉」

まあ話飛びましたけど、全然実はスライドを見てなかったんですけど。ちなみに、鹿の肉が一番

うまいのは、ほとんど流通してないんですけど心臓、心臓がめっちゃめっちゃ美味かったですね。で、これはレバーとかですね。とにかく鹿はよくジビエ料理とかって臭いとかって言われてるんですけど、全く臭くないというか、取れたその日に食べてるからなんですけど。あれ、保存が悪いんですね。日本って、ジビエのような自然の肉を普通のお店で流通させるには保健所を通して7回くらいチェックしなきゃいけないですよ。お肉屋さんで売ってる鳥豚牛肉っていうのはですね、もう最初っから同じ餌食わせて、病原菌が入らないようにして、工場で飼ってる動物しか流通してない。ジビエつつうのは、安全性を確認するために放射能検査だ、なんとか検査だって、出荷できるまで、安全基準検査がいくつもある、それで時間かかってだんだん味が落ちてるんですけど。取れたその日に食べる肉は、どの肉よりもうまいだけは断言しておきますね。

作品介绍

「6.4天安門のイメージ」「パルコ賞」

あー、僕の作品です。これが、僕がデビューするきっかけになった「6.4天安門のイメージ」っていう作品です。これを書いたのは、僕はまだ弱冠24歳というね、あなたたちとあんまり歳が変わらない頃、今から30年以上前ですけど。そのとき、日本グラフィック展っていう、美術の登竜門みたいなコンテストがあって、日比野克彦さんとかね、現代アートでいうとヤノベケンジ君とか、まあ

今、プロとして活躍しているアーティストもたくさんそこからデビューしていったっていうのがあ
るんですけど。僕はその日本グラフィック展っていうコンクールに小学校の先生してる時に、この
「6.4 天安門のイメージ」を出して、パルコ賞つつうものもらったんですね。大賞と1票違いで落ち
て2位だったんですけど、パルコ賞。1位は大賞なんだけど2位はパルコ賞。この微妙な価値観つ
ていうか、賞もらえたけど2位だからパルコ賞ってなったんですけど。まあそういう作品です。

「一万人のドローイング」

これはまあその後ですね。

自分全部手書きなんですこれ。「一万人のドローイング」って言って、新宿駅とか、渋谷駅とか、
大勢の人がすれ違う中で、何十万人もの人が行き来するけど、その何十万人を記憶に留めておくこ
とが出来ないから、その一万人っていう数を目標に、記憶に留めておけないそういった顔たちを記
録したっていう作品ですね。

「3.11 の写真」。これは部分なんで恐縮ですけど、被災地の写真、3.11 の被災地の写真をばらまい
て、震災のイメージを部屋の中にドローイングした。なんの説明にもなってないですけど、これ、
ドイツのデュッセルドルフ美術館で展示した作品なんですね。この時に、震災があった年にもうそ
こで展覧会やる事が決まっていて、それで、震災があったから、あんたたちドイツ来れないでし
ょってとかって言われて中止にしようって言われたんですけど。とんでもないと、今日本の状況を訴
えるために今こそやらせてくれって言って、デュッセルドルフでやった作品がこれですよ。まあ
やっぱりニュースの映像だけだと福島原発が爆発とかしてて日本滅んだと思われてて、それで、大

丈夫ですっていうのを、伝えたかったし、具体的にどこがダメで、どこがセーフかとか説明したかったんで、デュッセルドルフで展覧会やったんですけどね。

これは瀬戸内国際芸術祭で出した作品で、ちょっと多分説明すると時間が足りなくなるから、これは飛ばしましょう。

「津波が来る前の綺麗な海」

これは津波が来る前の綺麗な海のイメージの作品ですね。僕はもともとパフォーマンスというかアクティビストというか実際に行動を起こすような作品も作るけど、本当は絵描きですっていうのを、本当は絵描きなんですよ。もうほんとに3.11の東日本大震災の時は、なんでかわかんないけど、普段綺麗な青い海が真っ黒だったっていうね。真っ黒な海が押し寄せてきたつうね。だから、僕はその、本来持つ美しい色の海を描いてたんですけどね。

「パルコ賞当時の新聞」「名前の由来」

あ、これ、そんときの新聞ですよ。僕若い頃の写真。若い、痩せている、体重が60キロないぐらいですよ。58キロぐらいの時ですよ。

まあこん時にパルコ賞獲ったというんで、地元のタウン誌が僕の名前をパルコキノシタっていう名前で勝手に載せちゃったんですよ。で、僕は後からパルコキノシタと言う名前のコンセプトを後付けで考えたんですけど、パルコっちゅうのは、英語で言うパーク、スペイン語でいう広場の意味で、僕はその名前の名字が木下なもんだから、続けて読むと公園の木の下っていう話になって、ちょっとダジャレぽくなるんで、僕はもともと美術館とか、お高い値段で作品を売っている高級な画廊っていうのはどうも苦手で、自分の日常生活に即したようなレイヤー感で生活の中に寄り添えるようなアートが本当のアートではないかみたいところで活動してたんで、美術館や画廊じゃなくて、自分の作品を発表するのは公園でいいんだみたいな感じパルコキノシタっていう名前にしたっていう、これが名前の由来ですよ。

「漂流教師」

これが『ガロ』で連載してたときの僕の「漂流教師」の1ページですよ。

これはですね、僕の授業、お楽しみ会を企画するっていう感じで、どんなくだらないことでも一生懸命やったらすごいことになるぞっていう漫画の話のテーマで、テレビのCMの消臭ポットって、すごくくだらない15秒のCMがあるんだけど、それを完璧にコピーしてみんなで踊ろうみたいなのを、すごく真剣にやるっていう回があるんですね。どんなにくだらないしょうもないことでも全力でやると人を驚かせたりすることができるっていうね、そういうことを漫画で表現したっていうエピソードでした。

「幽霊でもいいから」

さっき牧先生がおっしゃった、津波をイメージにした僕の作品なんですけど、漫画チック、もともと漫画家だから、漫画っぽいアート作品を作るのは当然だって言えば当然なんですけど、まあちょっと前まではねアートの世界でこういう漫画的な文脈とかをね、持ってくるとうごく専門家からは苦笑いされていました。

90年代の頃から、現代アートの文脈には、オタク文化とか、サブカルチャーとかそういったものが取り込まれてきたっていう歴史がありましてね。でこれはその、学校の先生やりながら好き勝手ことして全然有名でもなかったパルコキノシタが、ちょっとメディアに出るようになった作品で、評論家の人が褒めてくれたんですね。作品のタイトルが「幽霊でもいいから」という。津波で犠牲になった人たち、もう会えない行方不明になった人たちに幽霊でもいいからもう一回会いたいんだ、いなくなった喪失感の寂しさみたいなものを、描いたんですけど。よく質問されるのは、どうしてみんな美少女なのかみたいな話はよく言われるんですけど、まあどうしてもこの当時、僕も余震がすごくたくさんきて、僕自身が東京に住んでいても家の瓦屋根が落っこってきたりして、身の危険を感じてた、東北だけの問題じゃなくて東日本全体が減びるんじゃないかくらいの恐怖に怯えていたそう言った時代、時期だったんですけど。

そこでなんか、いわゆるホラー映画みたいなゾンビとかドクロとか化け物みたいな怖いものとして死者を表現したくなくて、こう愛らしく愛情たっぷりに震災で連れて行かれた人たちのことを、愛情を持って表現したかったっていうのが大きいところだと思います。だんだん僕の気持ちは犠牲者に対する追悼の気持ちから、命を奪っていった神様とか自然に対する怒りみたいなものに変わってですね。

「スイートヒアアフター」

これは「スイートヒアアフター」っていうタイトルですけど。左側は切り立った山崩れがあって、右側はこれから津波が押し寄せると、真ん中にどうすることもできない人がいるんですけど。

被災者の人は、この作品だけは見るができないって言われたりもしましたけど。僕の気持ちってというのは、なんでこういう絵を描いたかっていうと、人間ちゅうのは、いつか必ず死にますし、今だって本当にちょっとしたことで、原発もそうですけど、例えば戦争とか、ちょっとした小競り合いとかもあるかもしれないけど、自分に全く落ち度がなくても、ある日突然命を絶たれることがあるかもしれない、だけど、自分が死ぬ最期の1秒まではまだ生きているから、どんな時でも、死に抗うじゃないけど、最期の1秒まで生きるのが人間だみたいな、そういう気持ちで書いたのが、「スイートヒアアフター」という作品で。

「海の帰還」

こちらは、「海の帰還」っていうタイトルなんですけど、防潮堤からずっと海を見ている幽霊たちがいて、ずいぶん何千人もの人が海に流されたまままだ帰ってきてない人たちが、遺体が見つかってない人たちがいっぱいいるんですよ。

で、陸にいる幽霊が海にいる幽霊を見つめてるっていうシチュエーションなんですけど。まあそういう作品です。

「います」

これが木彫り。石巻市内で亡くなった4,000人近い人っていうのが、どれくらいの数なのかっちゃうのを一目で可視化できるように、4,000体彫ったと。であの型取りをしてプラスチックとかで複製するんじゃなくて、まあ木っていう素材は一本一本の形が全部違うんで、コピペができないマテリアルを使って、一個一個下手くそでいいから心を込めて書こうと。

まあ、再度言いますけど僕は絵描きですから、彫刻においては完璧な素人なんですわね。わざと素人が心を込めたらどうなるかっちゃうのをやったんですけど。まあ一応4,000近く彫れたは彫れたんですけどね、自分の指は腱鞘炎になるわ、バネ指になるわ、ちょっと骨が変形しかけるところまで行っちゃったんで、ちょっとこれを超えるのは困難かもしれませんが。石巻の人から、ダイレク

ト過ぎる、犠牲者をそのまま作品にするのかって怒られるのかなあと思ったんですけど、まあ反応は様々で、もっとやれって言うてくれた人の方が多かったですね。

結構いろんな人がいるんですけど、僕、石巻で展覧会やるんで、被災人とか何か喪失してしまった人を主人公に作品を作っていたんですけど、実はそのリボンアート・フェスティバルのような国際的なアート・フェスティバルっていうのは来場者が何十万人なんですよ。だからその、ダイレクトに石巻で被災した人の方がもはや今マイノリティになってしまって、なんか本当に被災した人たちの本当の気持ちを代弁するっていうことを僕がやろうとすると、すでにそれが少数派の意見になっちゃったりしてる。ここが一番僕辛かったですね。やっぱその石巻でこれからも暮らしますが、やっぱその失いつつも自然と向き合い続けて生きていくみたいな感じでこれからも作品は作っていかうとおもいますがね。まあいろんな人がいましたね。作品見て、なんか亡くなった人に対して申し訳ないっていう気持ちを持っている人がかなりいるんですね。で木彫りの作品表情が笑っていたのでホッとしましたと言って、ワンワン泣いちゃったりとか。あとその、あん時自分は何もできなかったけどかって、自分が震災の時に何もできなかった言い訳をなぜか僕にずっとするおじさんとか、まあ、いろんな人と出会いましたけど。その、とてもたいへん特別な出来事が 3.11 だったっていうことで。3.11 を、皆さんも当時は小学校まだ 10 歳とかそれくらいだと思うんで、ちょっとまあ、どういうふうに受け止められたかはわからないですけど、これからもその 3.11 のことは永遠に伝えなければいけないとは思っていますけどね。

「鹿キャンピングカー」

これはあの、鹿を取るハンターの僕が一転、鹿を取るだけじゃなくて、鹿を見るためのキャンピン

グカーを自分で作ったっていう、これキャンピングカー作品なんですよ。この中家になって住めるんですけど。鹿って実は夜行性で昼間探しに行ってもほぼ会えないんで、夜は鉄砲撃っちゃいけないんですけど、まあとにかくまず鹿が見たい人のための夜のツアー専門のキャンピングカーを、軽トラを改造して作ったっていう、まあそれはその作品ですね。

【リボンアート・フェスティバル】

リボンアート・フェスティバルっていうのは、たまたまですけど、僕の考えているアートの価値観と全く合致するととても素晴らしい国際アート展だと思いました。

僕言いましたよね、こうお高い何億円もするアートとかね、なんか敷居の高い、あなたたちこれが芸術だからよく覚えておきなさい、とかって押し付けられたりするアートとか、敷居の高いアートとか値段の高いアートとかじゃなくて、自分の身の丈にあった自分がちょうどいいサイズのアートっていうのを求めているというのが僕の人生のテーマだったんですけど。

リボンアート・フェスティバルのいいところはね、音楽、小林武史さんってミスチルをデビューさせた人、サザンオールスターズのプロデューサーやってる人が、やってるんでね。音楽とアートとあと石巻の美味しい料理と、この三つの要素が合体したアート・フェスティバルっていうんで、

漁師の嫁、港町の魚を料理したりするおばちゃんの中で、リレイ・シュシュですよ、Salyu さん、歌手がですね、おばちゃんと一緒にカラオケやっているっていう、これが最高にいいんですよ。なんか、Salyu さんってものすごく歌が上手な方でね、デビュー当時は小林武史プロデュースでね、岩井俊二監督でリレイ・シュシュの映画があったんですけども、まさか、このスーパー歌姫と一緒にカラオケをやることになるとは、みたいな。この超バリアフリー感がね、リボンアート・フェスティバルのいいところなんです。地元の人も、現代アーティストも、ミュージシャンも、みんな一緒になってカラオケやるみたいな、こういう感じですね。まああと僕もここでワークショップ

を例によっていろいろやったりとかね。

この人はね、白崎さんって言って、もともと上々颱風っていうグループのボーカルだった人ですけど、一番わかりやすいのでいうとね、「平成狸合戦ぽんぽこ」の主題歌歌っている人なんですね。この人が、僕の木彫りを見て、一緒になんかやろう、っていう話になって、これもだからそのなんというかな、現代アートのルールと音楽のルールってやっぱ違う訳なんですけど、すべてのハードルを取っ払った自由なバリアフリー感があって、こういう音楽と現代アートが一緒になんかやれたっていうことがあって。これもおそらく東京だったりするとね、騒音の問題とかね、近所に対する配慮とかね、あと電気とか電圧とか容量とか、いろんなテクニカルな問題とかあってね、首都圏とか都会ではね、まあできなかつたと思います。でもこういうことが、面白いからやっちゃおうって、ポーンって決まったりするっていうのがフェスティバル、アート・フェスティバルのいいところかな、なんて思いますけどね。

「ワークショップ（塗り絵）お年寄り向け」

あと僕、このね、埼玉大学は学校の教員を目指してるかたもかなりいらっしゃるって聞いたり、この中でも教職免許取ろうとしている人もいるんじゃないかと思うんですけど、まあワークショップが出てきたのでワークショップを見てもらいましょね。

さっき説明した「おしるこカフェ」もそうですけど。おじいちゃんおばあちゃんに、ワークショップやろうとして最初絵を描かせようとしたら、お年寄りは、自分では何のアイデアも浮かばない

から絵が描けない、つったんですね。そっから僕はあの、塗り絵を、線画を、事前を書いて、それもなんかちょっと役に立つような、オレオレ詐欺に注意みたいな、そういう塗り絵を書いて、おばあちゃんに塗り絵やって、持って帰って、壁に貼っというとかってやったら、これが割と当たってですね。で、子どもたちとはよく工作をやるんですけど、じいちゃんばんちゃんには塗り絵をやるっていうのを、これを「おしるこカフェ」でやってるいるということですね。こんなばあちゃんたちがね、色を塗るんです、あのやっぱ毎月一回ずつやるんで季節に合わせてやったりとかします。

「ワークショップ（仮面）子ども向け」

これはその石巻小学校で、まあ時代的に「暗殺教室」が多いんですけど、よくね、学校の授業なんかでは、アニメとか漫画を真似して描くのはダメっていうところ多いんですけど、アニメや漫画を真似して本当にそっくりに描けるっていうのは、それはそれでたいした技術だから、僕なんかはもうどんどん真似していいよ、アニメキャラ描いて、描けるもんなら描いてみやがれ、どんどん描けつつやって。これは君も風の又三郎だみたいな感じで、風の又三郎って見たことある、ない、じゃあみんなで考えよう、みたいなね。でこれで君も仮面女子男子っていうタイトルでやったんですけどね。これ連載中のコラムですけど、ちょっとこう手の込んだ、割と僕が作ったやつは髪の毛つけたりとかして、誰でも美少女になれるとかで、これあの買い物袋の紙袋に絵を描いて作るパターンですけどね。

「ワークショップ（ダンボール）子ども向け」

これは流山の生涯学習センターでライフワークとしてやってるワークショップなんですけど、生涯学習センターはダンボールとかを事前を集めたりしてくれるので、こう大きなものができます。

子ども向けワークショップの鉄板が、秘密基地、迷路、トンネル、この三つはね、どんなやる気のない小学生も、めっちゃめっちゃテンションが上がって喧嘩になるくらい盛り上がるんで、ネタに困った時、僕、必ずやるようにしてますよ。なんか女子が秘密基地作ったらね、「ここは男子入っちゃダメ」とかってね、女子だけここは。そしたら、男子が進撃の巨人化して襲うんですよ、女子の基地をね。そしたら、「ダ、ダメだ、男子が襲ってきた、女子武器を作れ武器」、とかってあのダンボール、新聞紙でこう棒とか刀とか作って。

結局朝ぐらいから秘密基地のワークショップをやると昼ぐらいには完成するんだけど、夕方にはまた壊れるっていうね、何のためにやったのかわからないけど、とにかく男子と女子が戦って面白かったねみたいなね。割とその僕のワークショップの場合はストレス発散してやりたい放題やって、まあ終わりみたいなそういうのが多いですけどね。

これは、まあトンネルですね、これは親にも評判が良くて。ポイントとしては、穴んところにセロハンを貼ると蛍光灯がいろんな角度から光が入ってスタンドグラスみたいに、いろんなこう淡い光を出して、その光を頼りに真っ暗なトンネルを抜けていくという。お金ほんとかかかんないんだけど結構綺麗にできるっちゃうトンネルのワークショップやったりしてますね。

だいたいあの、学校で図工の授業やると40分とかの枠内で準備から片付けまで全部終わらさなきゃいけないとか、自分の縄張りがあるんで机より大きいサイズの作品を作れないとか、いろんな制約があるんで、なるべく僕のワークショップではそこを壊すことから考えて、作った後で遊べるって結構重要な要素で、この時はコスプレをやって音楽を鳴らして、パレードをするっていう、そういう最後に晴れの舞台があって、こういうコスプレをやるという作品でしたけどね。

楽しそうでしょ。いちばん最高な例は、僕が何も教えないってことですよね。子どもが自分でこう、ここに道案内あったほうがいいよね、ここちょっと間違えやすいからここ間違えるなって矢印書いていいですか、とか。いいよ、とかってね。

「ベネチア」

これは話が飛ぶ、これベネチアですね。これは震災があった2011年にベネチア・ビエンナーレに行って、僕がこうやってパフォーマンスをして、復興支援で空き缶置いといて寄付金を20ユーロぐらい集めて、で、寄付をしたっていう話ですね。

【紙芝居】

これはですね、最後の方の資料なんですけど、コトのアート研究所、さっき紹介した、地域に民泊を作って交流人口を増やす、古い空き家を再利用する。そのコトのアート研究所の一環で震災の被害に遭いながらも、奇跡的に助かった人がどうやって助かったのかっていうそういうふうな経験談を直接本人にインタビューして、本人の話を元に紙芝居にして伝えていこうという、その継続するシリーズでもって、当時は震災時にニュースにもなったんですけど、孫とおばあちゃんが十日間津波で流された家の中に閉じ込められていたのが奇跡的に助かったっっちゃう、実際に起きたニュースがあって、そこで助かった阿部仁くんという男の子に取材を申し込んで、その時の様子をストーリーにした。おばあちゃんが地震が来たから大事なものが入ってる金庫を二階に持ってきてってん

で、二階から降りていったんですね、少年が、そしたらなんと驚いたのが、自分の部屋から見えた窓の世界が水族館状態で、真っ黒な津波の海がこう天井にいっぱいまでタプタプに張ってきて、窓ガラスにヒビが入って部屋の中が浸水し始めていた。結局この家はどンドンどンドン浸水が始まって、一階と二階がちぎれて、その二階部分が数百メートル流されちゃうんです。

で、上も下も完璧な部屋の個室の中で塞がれて、結局、氷点下、まだ東北の三月なんで、氷点下になるような寒いところを十日間飲まず食わずというか、最小限の食料だけでしのいだっていう、奇跡の生還って当時はかなり新聞にもなったんですけど、氷柱ができていた、そういうところで、奇跡的に生きて帰ることができた。発見があと1日遅かったら、足がもう凍傷で切断するしかなかっただろうと言われてるとか、そういうふうな実際にあった話を、助かった人にいろいろ聞いてですね、それを紙芝居にするっていう、僕のライフワークで今やってるんですね。

他にもね、ほんとに、自分がもう津波で首まで浸かってるんだけど、海が、津波がこう流されてる時に、自分の知ってるばあちゃんとかが、ずっとずっと津波で、こう海までおばあちゃんがこう流されてるんだって、もうそれを自分首まで浸かって、掴んで山にあげて、掴んで山にあげて、もう瞬間だけど4、5人のばあちゃんを助けたっていう、ものすごい力持ちの兄ちゃんとかもいるんですよ。

いってみればその反対に、ものすごい自分の親友のおばあちゃんがもうあと30センチのところ、手が届かなくて、助けて一っ言いながら流されていったのに何もできなかったっていう、それをいまだにすごく悔いを残ってるって言って、それで心を痛めている。

そういう人もいるからこそ、無事に助かることのできた人、いろんな人命救助に貢献した人なんかの話をこれから取材して、紙芝居化して、それをアーカイブして、震災の記録として残していこう。まあ、そういうことも、僕はやってるっちゃうことですね。

これ実際の事件。これ、実際に家ですけど、グッチャグチャですよ、もほんとに無茶苦茶なところでよく助かったと思います。これがこの本人ですね。もう今は大学、当時は中、高校一年生、それが今はもう社会人で、いま石巻にある石ノ森漫画館というところで働いているんですけどね。よかったよかったっていう感じですけどね。これコトのアート研究所内部なんですけど。

「津波被害写真」

これは気仙沼の漂流した船、これが破壊、津波の被害にあった自由の女神。これが震災から3ヶ月4ヶ月経った時の女川町。今でも石巻とか行くとですね、見た目は綺麗なんだけど、家の基礎部分だけが残って瓦礫状態になってるとことかいっぱいあって、そこ多分観光客も誰も気づいてないけど、そこ家があったけど流されたっていうそういう場所がまだたくさんあるんですよ。

「傷ついた仮面ライダー」

これ手のもげた仮面ライダー、石ノ森漫画館のところに行って、仮面ライダーの人形を僕はたまたま拾ったわけですよ、そしたらその仮面ライダーには手がついてなかった。

なんかこの仮面ライダーの人形見てたら、なんかこの傷ついた仮面ライダー見てたら、パルコ、

任せたぞ、みたいな感じで、ライダーが俺に言ってるような気がしたんで、で、そっからずっと被災地に関わると心に決めたっっちゃう、些細なことなんですけど、僕子どもの頃から好きだった仮面ライダーが、こんなに大変な、両手がなくなったりして大変な目にあってるんだから手伝わなきゃ、みたいなのはちょっと思ったりはしましたね。

【仙台四郎】

あ、これが水木しげる先生のかいた仙台四郎。仙台四郎っていうのはね、東北の人は知らない人はいないですけど、実在した人物なんですけど、この人が、商売の神様っていうことで、こっちでいうと、えべっさんとかね、関西でいうとビリケンさんとか。仙台四郎さんは実在した人間なんですけど、この人を拝むと商売繁盛するみたいな、そういうことで、なんか人間たちの噂で作られていった神様みたいな人ですよ。これが私、もともとね今から15年くらい前に、仙台で展覧会やった時に、その時に仙台四郎に似てるって前から言われて、ちょっと心の中で、俺って仙台四郎なんだってちょっと自覚はしてたんですけど、まあ最近は震災があったから、それを逆に利用して、はいはいはいはい仙台四郎ですよー、ってすごいイカサマ感満載でこう仮設住宅のおばあちゃんのこととかに関わっていったみたいな感じ。まあバカはバカなりに、こうツッコミをね、ばあちゃんじいちゃんたちに入れてもらうために、まあそういうことをやっとなるっっちゃう感じですかね。ばあちゃんのツッコミ欲しさにやってる仙台四郎活動というのもあります。

もうほんとに今のでいうと、ちょっといろんなことやりすぎて、結局ほんとにアーティストなんかんなのかちょっと怪しくなってきた感じはするんですけど。まあ、あの、牧先生からも言われたんですけど、学生さんたちが、僕と話ができる機会はあまりないので、ちょっとアートと関係のないことも含めてですけど、「ちょっと俺に質問がある人は今聞きますからなんでも言ってください」って言って、挙げる人はあまりいないという話もあるんですけどね。

とにかく僕は震災直後から被災地ガンガン見て、それでは飽き足らずにスマトラ沖地震の被災地も全部見てきたりして、とにかく現場現場、とにかくその場所に行くってことをずっとやってきてたんで、被災地のことでもなんでも、向こうの人たちが今どんなふうになんか何を考えているかとか、そういうのも全部、答えられる範囲で答えますからなんか質問があったら、言って欲しいと思いますけどね。

あとリボンアート・フェスティバルなんですけど、今年8月3日からあるんですけど、圧倒的にボランティアを募集してまして。実はボランティアもあるけどアルバイトも募集してて、ホーム

ページでリボンアート・フェスティバル検索してくれればすぐに、皆さん学生さんのボランティア、アルバイト募集があるので、お金がないけどリボンアートちょっと興味あるっていう人は、そのままバイトかボランティア募集すると、寝るところと食べるところくらいは多分準備してくれるんじゃないかなって。前回2年前のリボンアート・フェスティバルがそうだったんですよ。泊まるどころと食べるところがあったのね。

たとえば何もしなくても、ただそのリボンアート・フェスティバルを見に行くっていうだけでも、すごい立派な復興支援だと思うんですよ。とにかく今人がいないんで、若い人がいるっていうだけでものすごいウェルカムなのと、今度6月30日に石巻の震災後、復興支援でできた「石巻2.0」っていうのがあるんですけど、そこで石巻に新しい出版社ができた記念イベントで、「前前前世」を歌ってたあの野田洋次郎さんがやってきてトークショウがあったりとかしますし。

僕自身も結果的に別に自然とそうなっちゃったわけなんですけど、小林武史さんがback numberとかいろんな人をプロデュースしてたりするんで、まあアーティストやってたら、どっちが偉いとかでなくて、そういう、ミスチルの人とか、back numberの人とか、そういう人となんか普通にしゃべり、お話とか喋りができたりするようになったりして、このバリアフリー感もすごくいいなあって思いましたね。

質疑応答

学生：

お話ありがとうございます。先ほどリボンアート・フェスティバルとか子ども達のアートを見るというところでちょっと思ったのですが、やはり芸術美術展とか行くと、作品は結果みたいな感じで、こういう作品ができましたっていうのを見るところなんですけど、どちらかというとならば、先ほど特に子ども達に表現を教えるっていうのは、どちらかというとならば過程を見る感じもあって、そこでなんですけども、どちらの方が、どちらの方がっていうのもあれなんですけど、過程と結果って、どうやってアートをする中で、見ていったらいいのかなって、ちょっと曖昧な表現なんですけれども、お伺いしたいなあって。

パルコキノシタ：

あー、すごい質問なんですけど、おそらく作品っていうものは、例えばそれがモナリザだろうが、ミケランジェロであろうが、永遠に残すっていうのは不可能だと思ってるんですね。もし残るとすればその人の人生の中の記憶に残ること、それだけが残るっていうことで、だからその、例えば今思うのは、小学校の子たちに図工好きかって言ったら、ほぼ全員が好きって言うのに、中学とか高校とかだんだん歳をとると、図工やアート美術が好きって言う人がだんだん減ってくるっていう現象があるんですけど。とにかく図工やって楽しかった、表現、物作りとかをして楽しかったっていう記憶があれば、大人になってまた子どもが生まれて、その子どもとまた一緒になんか遊んだりっていう時に、その記憶を辿って、もう一回そういった表現をやれるのではないかと。そういう形で創作の喜びとか楽しさとかが受け継がれていったらいいなあ。

だから僕ワークショップは子どもが主体でありますけど、その周りにはいつも母親とか親がずっと子ども達の様子をガン見していて、場合によってはそのお母さんがどんどんワークショップに私も混ぜろって言って入って行って、子どもと一緒に物作りをしたりする。まあ本当の意味での表現のバリアフリーっていうの考えたら、僕は大人も子どもも物作りが楽しいっていう空気を作ることが作品だと思ってますからね。

学生：

ありがとうございます。

パルコキノシタ：

想像以上に、たくさんの方が聞いてくださったんで、まあ、あのちょっと時系列、順番がごちゃごちゃになってるんですけど、多分言いたいこと言ってるはずなんです。震災の復興支援で4年も5年もコツコツとやってたあとで、インドネシアに行かないかっちゃう話があったんですけど。インドネシアから始まったんで、ちょっと順番があれかもしれないけど、震災から現時点まで8年ありますからね、その8年の間に、何十回通って、「おしるこカフェ」も何十回もやって、もういろんなあの手この手でいろんな活動やったっていう中で、よし、じゃ、ちょっとスマトラ見てくるか、みたいな話があって、で僕は僕でこうアーティストとしての活動も並行してやりながら、アートはアートとして活動続けるんだけど、ワークショップはワークショップで続けるんだけど、アート活動と震災との向き合い方が時々こうクロスして離れて、またクロスしてみたいな、まあそういうことですかね。

野中進：

今日はどうもありがとうございました。僕が思ったのは、インドネシアでやっぱり宗教的なフレームというか枠があって、だから割と人が被害とか失ったものを耐えられるという話でやっぱりすごく印象的だったんですけど、そういうのってやっぱり基本的に今の日本ではちょっと無理ですよ。そういうの、実際コミュニティ、強いコミュニティ作りとか緩く連帯できないかっていうことがありましたけど、その辺はどうお考えですか。

パルコキノシタ：

あの、実際にその石巻で起きているところで、被災地のゲストハウスとか行くと新興宗教の、なんか聞いたこともないような宗教団体の教本みたいなものが、本棚とかいっぱい置いてあって。なんかそれぞれの宗教団体は被災して心を傷つけた人を救済したい、その人なりの善意かどうかかわからないけど、震災が起きた後に、いろんなそのカルトとかって揶揄されたりするような新興宗教の団体が、いっぱいその教会を作ったんですよ、石巻に。

今もそういうとことがあるんですけど、それじゃ遅いんですよね。やっぱりあの、僕はもともと生まれは四国の出身で、四国といえばまあ弘法大師、お大師さんで、真言宗っていうのがありますけど、宮城県は割と曹洞宗っていうのが多いんですけど。まあ仏教なんかなったりすると、人間ちゅうのは生まれながらに生、老、病苦、苦しみから常に逃れることができない。仏教つうのは、例えば人の苦しみを和らげてあげるために発展していったっていう経緯があると思うんですけど。僕なりの解釈ですけど、イスラム教つうのは、ラマダンにしる、豚肉食っちゃダメとかね、とにかく、こ

う禁止事項が多いかわりに、それを全部乗り越えた人はものすごく、こう神によって守られたすごく立派な人っていうふうになっていく。

そのイスラムは、そのショックなことがあっても心が傷つかないようにメンタルを予防するような効き目があるような気がしました。仏教は最初から弱って傷ついた人をいかに負担を楽にしてあげるかっていう発想のような感じするんですけど。で、やっぱりその、どうしてもみんな心が弱った時、何かに頼りたいって時に、ひとりぼっちの人がすごくたくさんいて、その人たちからこう心が弱っていくというのがあったんで、僕はとにかく気をつけてることは被災地でひとりぼっちの人を作らないってことですね。だからあの、ばあちゃんじいちゃんとか、なんでもストレス発散でもなんでもいいから、どんなくだらないことでも、とにかく「おしるこカフェ」に来てね、っていうのを続けて、ささやかではありますけど、何にも問題が解決するような能力もなければ、ヒーローでもなんでもないんだけど、とにかくひとりぼっちの人を作らなければ、その人が、すごく苦しんでるとか、なんかそういうのが、ちょっとでもこう気持ちを共有できることができれば、っていうのはありますね。

やっぱりあの、仮設住宅に住んでた人たちが、復興住宅にいくわけですけど、割とひどい目にあった人から優先的に立派な復興住宅に抽選で行くことができるんですけど。なんかニコニコしてるような人でも、仮設住宅暮らしで、2ヶ月してる時にストレスで病気になって、16時間の手術で肝臓全部とっちゃったみたいなことを、ケラケラ笑いながらいうばあちゃんとかいて。もう、本当に震災直後、どれだけみんな大変だったかっつうのはね、口には野暮なこと、口には出さないけど、本当にみんなしんどい思いをしてる人ばっかなんですよ。だから、できるだけもうアホアホに、美味しいものをたくさん食べて、遊んで、おしまい！みたいな感じでまあ心がけてますね。

(文字起こし：松本匡史・埼玉大学大学院人文社会科学科博士前期課程2年)